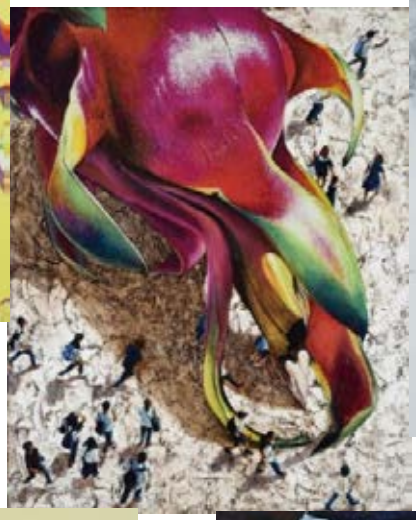
Women Artists Association

NEWS

女流画家協会　会報

2021.12　Vol.11



第 74 回展　受賞作品より

事務所から

第 74 回展と記念展

事務所代表　中村 智恵美

女流画家協会出品者とその関係者の皆様はご存じの様に、2021 年 5 月 29 日～6 月 4 日開催予定で準備にあたりました第 74 回女流画家協会展は、6 月 2 日～4 日（14：30 迄）の短縮開催となりました。約 2 年に亙る COVID-19 によるパンデミックの為、美術館も閉鎖の対象となった為でした。考えうる限りの感染防止策をとり、搬入・審査を終え陳列の準備を整えての、待ちに待った静かな開催となりました。ご覧になられた方はお分かりと思いますが、例年より出品者は微減しましたが、描きこまれた作品群は 2 年の空白を埋めるに余りある秀作揃いでした。中嶋委員による YouTube が HP にて公開されていますのでご覧頂けます。

また、当協会は昨年より女流画家協会発展に尽力いただきました委員の作品を毎年数点ずつ収蔵する事を委員会にて決定し、昨年は岡田菊惠委員、吉江麗子委員の作品を収蔵しております。本年度も約 10 名を予定しております。これは記念展などで展覧予定です。

前回にもご報告致しましたが、第 75 回展～79 回展迄の 5 年間は東京都美術館の組替により、会期が変更となります。第 75 回記念展は 6 月 7 日～13 日に決定しております。様々な企画を構想してはおりますが、現在のパンデミックの行方を見守りながら、記念展となる第 75 回展を女流画家協会の更なる発展への希望の道標としてゆきたいと思っております。

最後になりますが、創立当時から当協会を支えご尽力頂いた、入江一子先生（享年 105 歳）のご冥福をお祈り申し上げます。

第 74 回展報告

会計・HP 担当　中嶋 しい

昨年、“展覧会ができて当然”だった世の中が一変しました。

続く 2021 年。中止にせよ決行にせよ賛否両論がある中で、決断を下さなければならない中村代表の姿勢を間近で見ることができ、大変勉強になりました。

〔搬　入〕

搬入決行を発表してからは、事務所一同、安全に開催するための準備に猛進。密にならない集合方法やパーテーションアクリル板の作成、防塵マスクの用意など、前もって出し合っていたアイディアをサクサク実行に移しました。

〔2 回に分かれて行った審査〕

そして迎えた緊急事態宣言下での搬入。搬入しても開催できる保証がなかったわけですが、審査時の委員皆さまの真剣な様子はいつもと変りなくパワフルなものでした。入選・受賞作が決まり、しかし講堂は開かず授賞式は中止。賞状などは郵送でお送りするという事実に悲しくもなり･･･。せめてわずかな日数だけでも展示できることを祈りながら作業を進めました。

たった 3 日間、されど 3 日間!!展示ができた喜びは、作家全員、大きかったと思います。見に来ることができない地方の方々にも喜びを届けたいと思い、会場風景の動画を撮り、初めて YouTube（女流画家協会チャンネル）にアップをしました。素人仕事なのでうまく撮れませんでしたが、多くの方から「会場に見に行けたような気がした」と言っていただき安堵しております。

現在すでに 75 回記念展に向けての準備が始まっています。皆さまにご指導いただきながら、精一杯つとめていきたいと思います。

〔会場入り口〕

〔入江先生最後の作品が飾られている（3 室）〕

〔抽象の部屋（1 室）〕

７４ 回 展　　受 賞 者 の 声

（上野の森美術館賞）
よだみちよ（会員）

「Factory Fourth ～boot～」
130F

この度は、名誉ある賞を頂きまして、大変光栄に思うと同時に身の引き締まる思いです。
長年、無機物素材と対話し、素材の内なるエネルギーを見いだせるよう表現してきました。2 年程前から素材の表現方法を改めて見直し、新たな技法を見出すべく試行錯誤しておりましたので、評価して頂き喜びもひとしおです。今後も更に努力し、精進してまいります。

「マリオネット」
130F

（原光子賞）
鈴木多美子（新委員）

昔、恩師の黒田頼綱先生に「絵を描いていくつもりなら、休まず描き続けなさい。」と教えて頂きました。若い頃は気楽に考えておりましたが、年を経るにつけ、続けることの難しさを痛感する様になりました。しかし女流展で年に一回、否応無しの〆切りと発表の場を与えて頂いたお陰様で、35 年間続けてこられました。今後も続けていければと思います。

「ゆらり―21」
75×55

（東京新聞賞）
朝比奈則江（会員）

コロナ禍で展覧会に行くことができず、動画配信で会場の雰囲気を知ることができました。大きな作品の中で版画作品に目をとめていただき、賞をいただけたことはこれからの励みになります。心の「ゆらぎ」をイメージして制作していますが、これからも心の襞を見つめ続けようと思います。

（会員賞）
今井博子（会員）

出品作品は「青空を待つ」です。女流展に初出品した翌年、通知を待ちきれず都美術館に行くと、私の名前はありませんでした。発表を見に来られた先輩の方が、意気消沈している私に、「描く気持ちが沸くのを待つのも大切よ」と仰っていた事を思い出します。今年はコロナの暗雲が途切れたその先に、青空が広がる日を待ちながら、制作しました。

「青空を待つ」
130F

（大村文子記念賞）
加藤浩恵（新会員）

「言葉無き者 Ⅱ」
100Ｓ

幼少期、父と共に美術館によく足を運びました。その頃から美術の世界に関わることは憧れでした。沢山の師と出会い、描くことの厳しさ・喜びを今も学んでいます。制作時、逢うことが叶わない人達や懐かしい風景を想い、時間や空間を越えて旅をするような幸福な感覚を体験することがあります。光と陰、存在というものを追究し、描いていきたいと思います。

「work - 水底 - 」
100Ｓ

（マツダＢ賞）
高木須美（新会員）

画面を四角いキャンバスと相似形のパターンで埋めます。そのパターンの幅のみを少しずつ変えることで形・動き・空間を表現出来たら？そんな制約の中での作画に面白味を感じています。30 数年飛び続けて今年 84 才、可能であれば今少し不倒距離を伸ばして着地まで女流展を楽しみたいと思っています。

「立ち上れ！Ⅰ」
100Ｓ

（トークロ・東美賞）
鈴木恵子（一般）

初めて熱気球を見に行った時気球の大きさや色彩の美しさそして、立ち上がる時の刻々と変化する姿に感動しました。また、気球を立ち上げようとするパイロットやスタッフ達の動きも大変興味深いものでした。熱気球とそれを取り巻くものに心の中の感情を込めて描いてみました。受賞の喜びを励みにこれからも描き進めたいと思います。

（リキテックス賞）
宍戸幸子（新会員）

「Life」
130F

コロナ禍、緊急事態宣言下で多くのイベント等が中止されている中、この度の受賞は私にとりまして記念すべき第 74 回展となりました。種々な思いが走馬灯のように駆け巡っていきます。表現方法が異なっていても根底にあるのは「宇宙」地球を眼下に遥かなる広大な宇宙、ワクワク感を胸にこれからも精進してまいります。

（マルオカ賞）
新舘敏恵（新会員）

「記憶（Ⅰ）」
130F

私は最近少し有名になりました千葉のいすみ市に生活しています。絵を始めたのは母の介護が必要になった 45 才位の時で油で風景や静物を描いていました。60 才の頃、糸田玲子先生と出会い、水彩の美しさ、抽象の楽しさを知り、現在に至っています。今回の絵はコロナ禍の中、少し明るい色彩で希望を感じるように描いてみました。思いがけず賞をいただき嬉しく思っています。どの位続けられるか分かりませんがもう少し頑張ります。

「誰も寝てはならぬ」
130F

（ホルベイン賞）
斎藤由比（新会員）

幼少の一時期を根津で過ごし、また、父が二科会所属だったこともあり、上野の都美館は私にとってとてもなじみのある場所です。昔のギリシャ神殿のようなクラシックな佇まいを今も懐かしく思い出します。館内の食堂で初めてコカ・コーラを飲ませてもらったのも懐かしい想い出です。父に連れられ 20 歳で渡仏して以來、ヨーロッパの花々や風景を描き続けてきましたが、これからは物語性のある作品も発表していきます。

《 追　悼 》 創立の頃から会にご尽力くださった二人の先生のご冥福をお祈りいたします。

入江一子先生を偲んで

馬越 陽子

女流画家協会の最長老、入江一子先生が 105 歳の天寿を全うされた。春の女流展に 100 号、秋の独立美術協会展には 200 号を最後まで出品されたことは感嘆すべき事です。女流画家協会展には第 2 回展より出品。第 7 回、第 10 回展で女流画家協会賞、第 18 回 19 回で事務所を担当された。先生は朝鮮（現在韓国）の大邱で生まれられ 17 歳までその地で過ごされている。その後日本へ。女子美術専門学校師範学科洋画部に入学。8 年後 25 歳で再び朝鮮へ渡られそこで教員になられました。終戦を迎えた 29 歳で日本に帰国。改めて美術教員として教職にありながら女流画家協会、独立美術協会に出品され続け 1953 年独立賞受賞、1957 年独立美術協会会員。その間林武先生に出逢い、教えを受けられた事は貴重な事で、生涯を通して師と仰いでいられました。また東京芸大の林教室で林武先生に指導を受けた私にとり、入江先生は身近な方でした。17 歳までの多感な少女時代を大邱で過ごされその後のシルクロード紀行につながった事は自然な道筋に思えるのです。何度もシルクロードを旅された入江先生。シルクロードは「夢と希望」に溢れた世界と話されている。特に伎楽飛天のある雲崗石窟は黄土の断崖に掘られ、大同から 30 分ほどの距離にあるその石窟は大小 1,500 余から成り 51,000 体の仏様が刻まれているという。5 屈にある伎楽飛天の躍動感ある姿にひかれ 2 日間窟にこもりスケッチをされている。画面に度々登場する飛天の姿はその成果といえるでしょう。また「青いケシの花」が咲く高山に登り、伝説となっている「青いケシの花」を目のあたりになさるなどロマンを求める熱情には驚く。

シルクロード紀行の集大成を結集した「入江一子シルクロード記念館」を阿佐谷の御自宅を改造して開設されたのは周知のことです。

シルクロードに由来する陰りのない明るい画面は、入江先生の屈託のないお人柄を反映するものでしょう。今、先生の魂はシルクロードの空漠たる大空を舞っていることでしょう。

故入江一子　略歴

1916 年　山口県出身
　　少女時代を韓国・大邱(テグ)で過ごす
1938 年　女子美術専門学校卒業　後に林武に師事
1948 年　女流画家協会第 2 回展より会員として参加
1962，1963 年　第 16、17 回展会計
1964，1965 年　第 18、19 回展事務所代表
2021 年　8 月 10 日逝去　享年 105 歳

「回想・四姑娘山の青いケシ」　100F
2017 年　第 71 回展

糸田玲子先生を偲ぶ

平川 きみ子

2020 年 10 月 27 日 96 歳でお別れの日を迎えてしまいました。いつまでもご一緒に過ごせるものと信じておりましたのに、とても悲しく、寂しく、残念でなりません。

顧みますれば、私が「初めまして」と挨拶をしたのは 20 代の時。とてもドキドキした事を覚えております。あれから 40 年以上、先生と旅行や会食などご一緒に楽しませていただきました。

玲子先生は、中国青島生まれ。外交官だった父親の仕事で東京、パラオ、台湾と転居を繰り返し、太平洋戦争中は台湾で空爆を受けながら、独学で絵を学びました。昭和 21 年 20 歳を過ぎた先生は、日本領事館に勤めていた父親を病気で亡くし、母親とともに日本に引き揚げて世田谷の祖父宅に寄宿。翌 22 年、猪熊弦一郎氏のアトリエを訪ね、東京田園調布純粋美術研究所の研究生となり、5 年間学びました。以後、猪熊先生を生涯の師と仰ぎ、そこで画家糸田芳雄氏と出会い結婚。風間完氏と、仲人をして下さいました土方定一氏に大変お世話になりました。

先生の絵は、ロウと水彩絵の具を使う独特な技法と大胆な構図。「W．W．C．P」は、ワックス（W

ＡＸ）水（ＷＡＴＥＲ）色（ＣＯＬＯＲ）などのアルファベットの頭文字を繋げ、新たな画法として名付け、糸田芳雄氏と夫婦で確立した技法です。1980 年この新技法の作品を偶然目にしたアメリカセントキャサリン大学のＪ．Ｓｔａｕｔｏｎ教授がスポンサーとなり、翌年３月にセントポールの同大学で個展開催の運びとなりました。同大学で技法講義やレクチャーを行って帰国。途中、ハワイにお住いの猪熊先生、脇田和先生を訪問。この頃が先生にとって絶頂期であったと思います。

画業一筋で、長年に渡り女流画家協会委員、新制作協会会員とご活躍なさいました。いつも私共を見守り、励まして下さいまして、本当に有難う御座いました。感謝で一杯です。どうぞ、天国で大好きな方々とお楽しみ下さいませ。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。　合掌。

故糸田玲子　略歴

1924 年　（旧）中華民国・青島市(チンタオ)に生まれる、父の転勤（外務省）と共に東京・パラオ・台湾へ転居
1947 年　上京、田園調布純粋美術研究室で学ぶ（師:猪熊弦一郎）
1954 年　第 8 回女流画家協会展初入選
1956 年　第 10 回女流画家協会展会員推挙
1972，1973 年　第 26，27 回展事務所代表
2020 年　10 月 27 日逝去　享年 96 歳

「春雷」　100F
2001 年　第 55 回展

。。。回想録。。。

無理はダメ！！と言われても

山内 恵美子

17 才の夏休みで急ブレーキ。結核により今迄の事は全て棚上げに。本は読めるが、先が読めない。６才の時も、来月は入学式のはずが 3 月 10 日の東京大空襲で自宅が全焼。建築家の父が「二度と建てられない」と古い数寄屋造りに手を入れ大切に使っていたのだが、自分の目の前で二階が崩れ落ちていった。形がある物は無くなるんだと変な感動をしていた。この「数寄屋造り」と「17 才の病気」が、後々抽象的な何かに関わっていくような気がする。

少し生まれるのが早すぎた感のある、生まれながらの抽象作家で女流画家協会会員の小川孝子先生との出会いは 20 歳の頃。友人が「貴方にピッタリ」とアトリエに連れて行ってくれたからである。ピッタリかどうかは別として、大変風変りで素敵な大人達に出会えたアトリエだった。女流や抽象の会も創立の勢いがあり、気合の入った方々であったと思う。創立前後の話では、自分までその頃に居合わせた気になった。当時このアトリエでの会合の際、簡単な食事を出すにもお金がなく質屋に持って行く質草も無くなった事や、毎週のようにグループ展があり、作品を担いで歩いていくことも多かった事等。その頃には小川先生のお連れ合いがモダンアート創立会員の村井正誠氏である事も知る。

私は、いつか銀座で個展を、と考えていた。10 年くらい過ぎた頃、企画画廊での話があった。外国人も多く訪れる画廊から「日本人らしい抽象」と思われた由、会期は 2 週間、3 年ごとに 3 回行った。銀座で個展を始めると、アトリエでお目にかかった先輩方に「女流やモダンアートに出品はしないの？」と言われたが、以前、近しい人を出品させると会のレベルが下がると耳にしていたので、「自分は個展向きのようで」と、そのままに。その数年後、他の会から話があった事から「突っ支い棒はしないけれど自分たちの会に」との話になった。

「とどめおくこと」　100S
2017 年　第 71 回展

同じ画廊で個展をした作家とのグループ展など、その頃は毎月のようにグループ展があり、たぶんいつも走っていたように思う。先生らしくならない教員生活もなんとか続き、親との約束、「学生の後は自立」も果たした。それにしても結核の後、無理はダメと言われたが・・・。今頃おつりがきている。

◇つくば展報告

（つくば美術館外観）

女流画家協会つくば展は、2021 年8 月11 日から 8 月15 日迄、つくば美術館で開催されました。つくばエクスプレスつくば駅から徒歩 3 分の美術館です。会場 148.8m（パネル使用含む）の総壁面に、委員 43 名、受賞者 9 名、茨城県作家 8 名の 60 名 64 点のパワー溢れる大作が展示されました。

緊急事態宣言発令のままスタートでしたが、学園都市つくばらしく若い人や家族連れの方が多く来場されました。美術館の方々、来場者の方々から「素晴らしい！」「来年も開催されますか？」と感激のお言葉をいただきました。会場はコロナ対策万全で、初日は出品した委員の方も沢山来場し、ソーシャルディスタンスを保ちながら賑わいました。茨城県出品者９人が一緒に受付当番をして、懇親を深めることができたことも大きな収穫です。女流出品希望者の方にも出会い,素晴らしいアートシーンが生まれました。朝日新聞や、地元誌にも掲載紹介され、茨城県の方々に女流画家協会展を親しんでいただき、有意義な展覧会となりました。　（つくば市在住　楠本 惠子　記）

（会場入り口）

◇女流画家協会委員小品展　Vol.1

2020 年の新宿展は外部の企画者の協力のもとに開催され、成功裡に最終日を迎えました。

この度、そのアートディレクター氏からたまプラーザにある東急百貨店での展示を打診されました。会場の広さを考えると小品展示になりますが、会として小品展示をするのは初めてです。

8 月 31 日の委員会で提案され、こもごもご意見をいただきつつも開催が決定されました。希望者を募り、41 名出品の展覧会を開催するにあたり、画像や略歴など必要書類の提出など不慣れな方にもご案内して準備を進め、展示、初日を迎えました。

11 月 11 日（木）～17 日（水）東急百貨店たまプラーザ店アートサロンにて。コロナが収まりつつあることも相まって 300 名以上の記帳がありました。百貨店のお客様も興味を持ってくださる方が多く販売作品の半数以上はそういう方だとスタッフから聞きました。

郊外の百貨店ですが、文化意識の高い顧客を多数抱えている会場での展示は学ぶことも多く、また女流画家協会の存在を広く知らしめることに役立ったのではないでしょうか。　（須藤 美保　　記）

・・・・・個展紹介・・・・・

新戸部ひろみ油彩画展　―美しき宝、八戸―　　カフェ＆ギャラリーうみ音　　2021.7.2～7. 31

暗く長いトンネルからやっと抜け出たようで、気持ちが少し軽くなった今日この頃です。昨年 3月より新型コロナウイルスが蔓延。先が予測できない状態に世の中が陥り、沈んだ空気が流れていました。10年前の東日本大震災による福島原発事故の記憶が蘇った日もありました。目に見えないモノに翻弄される日々。外出を控え家に籠る生活は、再び自我と向き合う時間となりました。

考えてばかりいても仕方ない、出来ることから手掛けようと、まずは個展会場を予約。一年後にはコロナが収束していることを願いながら、モチーフを四季折々の八戸沿岸線と決め、制作に入りました。何度も足を運び、自然の様々な顔に触れ合っているうちに、段々と自分の内に元気が湧いてくるの感じました。

普段から絵を制作するテーマにいつも決めていることがあります。それは未来へ前向きでいるということです。これからどんな場面が訪れても、一歩一歩進んで行こうと思っています。

人間の大河ー馬越陽子展

日本橋三越本店　美術特選画廊　　2021.6.30～7.5

日本芸術院会員就任記念展を終えて

コロナの緊急事態宣言の谷間。束の間の解除期間の６月 30 日から７月５日、私の日本芸術院会員就任記念個展を日本橋三越本店で開催していただいた事に感謝しています。カタログ冒頭に大村智先生がメッセージを寄稿して下さった事は記念すべき有難いことでした。

病魔の嵐が世界中を吹きすさぶ中、画家はアトリエにこもり自己と対峙し画面を深める他なく、「小我を滅して大我に至る」道筋をさぐりつつ、他者を想い生命の尊さを伝える使命がある。医学者ではないアーティストはワクチンを作り出す事は不可能だが精神を支えるワクチンを創り出すことは出来る。コロナ禍にもかかわらず多くの方々が訪れていただいた事は感謝に堪えません。熱心に観てくださった方々の中から何通も「生きる意欲が沸いた」との手紙をいただき、これを読んだ時私の方こそ描く意欲が沸き「なにがあろうと描き続けたことが無駄ではなかった」と心が熱くなりました。これからも「人間の大河」に身をゆだねて描き続けてまいります。

酒井佳津子 2021 透明水彩画展

ギャルリ・シェーヌ　　2021.7.26～31

私の絵の活動として最近は女流画家協会などの団体展の他に個展を二年ごとに開催しております。今年はオリンピック・パラリンピックが7月に開催されることもあり、海外からの旅行者も見据えて日本人以外の反応を見られる良い機会ではないかと楽しみにしておりました。しかしながら、丁度私の個展の頃からコロナがこの日本に猛威を振るい開催はしたものの海外からの旅行者など皆無に等しく、また見に来て下さる方々にも大変申し訳ない様な状況になってしまいました。

絵を描くと言う事はそれを発信しなければ､ただの独りよがりに過ぎないのではないかとも思います。そういう意味では多くの人の目に触れる活動をすると言う事も大切ではないかと思うのです。

このコロナ禍に世界との繋がりを一層強く感じさせられました。最近は雑誌にも投稿し、またこれからはホームページも作って日本ばかりでなく世界に向けて発表して行きたいと思っております。

宮原むつ美個展

ぎゃらりいサムホール　　2021.10.25~30

宮原さんとスペイン

宮原むつ美さんが20年余り暮らしたスペインから帰ってきました。

1994年、スペインに文化庁在外派遣研修員として一年間滞在し、すっかりスペインが気に入った宮原さんは、その後も小学校で絵を教えながらスペインで暮らすことになります。持ち前のラテン風気質で当地になじみ、個展開催やグループ展等で活躍します。

時々帰国する日本でも、母 麗子さんとの二人展や個展のみならず、女流画家協会展への出品を海外から続けました。

一昨年、少し体調を崩して帰国後、今年の女流画家協会展に大聖堂（バルセロナ）の中庭を包む光を描いた『ESPERANZA』を発表されました。

その後10月の当画廊の個展には、スペインでの生活から生み出された作品を並べたいとのことで、スペインで描いた大作を主に展示しました。画廊で見る『ESPERANZA』は、聖堂の回廊から見あげる青くて深い空と午後の日差しが、中庭の壁を柔らかく優しく照らします。回廊の影の中にいる作者の来し方を振り返るような、光と影の対比は心地よく、爽やかな風を個展会場に運んできました。いつまでも心に残ります。また、水辺の集落を描いたスペインでのトリトマ賞受賞作「ESTEIRO」に、シュールレアリスムにつながる形而上絵画の「SILENCIO」や「家並＝HILERA DE CASAS」などに、屏風仕立ての作品や小さな花などを加え全32点の作品が会場を飾り、色彩豊かにあたたかく語り掛けるように詩情を醸し出しています。　　ぎゃらりいサムホール　井上哲邦

―研究会報告―

2021 年はコロナ禍の中、都美術館が休館になった 5 月を除き各月の研究会を予定通り開くことができました。昨年に続き都美術館の要請で定員 25 名の中、担当者、モデル、講師の 5 名を除く 20 名の申込制ですが、研究会の案内が届く 1～2 日後には 20 名枠が埋り、毎回キャンセル待ちが有り、部員の方々の熱意に嬉しく思っています。新規入会者がコロナ禍に拘らず 8 名おり、女流画家協会展の会場でのチラシ設置や目録に載せて頂いたことが大きかったです。

画面に向かって真剣に・・・

みんなでストレッチ

昨年に続き、固定ポーズ 20 分×5 ポーズの中に、ムービング 1 回 20 分を入れています。ムービングは好評で、「難しいですが固定ではできないポーズがあり、勉強になります。」等の声があがっています。

また、毎回委員を講師に部員の持ち寄ったエスキース、写真などの講評を行っています。

コロナ感染者数も落ち着いてきていますので、来年は都美術館の定員が緩和され、少しでも多くの部員の方々が参加できることを楽しみにしています。　　（瀬谷 貴久枝　記）

（担当：　松本恵美、岩井洋子、瀬谷貴久枝）

2022　第 75 回記念　女流画家協会展

会期：　2022 年 6 月 7 日（火）～13 日（月）
場所：　東京都美術館
搬入日：2022 年 5 月 26 日（木）

力作の出品をお待ちしております!!
詳しくは女流画家協会ホームページをご覧ください。

♥ 女流画家協会ホームページ
（https://www.joryugakakyokai.com/）

女流画家協会ブログ

編集後記

2019 年 12 月末、中国武漢市で発生した原因不明の感染症が世界中を恐怖に陥れてからまる 2 年、このところワクチンの効果かどうか、罹患者が急激に減少してきた。何とかこのまま終息して欲しいと願うばかりである。

さて、今年は女流画家協会にとって偉大なる大先輩を喪う悲しい知らせがあった。筋の通った画家人生をおくられた先生方を道標として、残された人生を歩んでいきたいと考えている。　(H.T)

女流画家協会　会報
Vol.11-2021.12

発 行 日：2021 年 12 月 15 日
発　　行：女流画家協会
編集委員：金谷ちぐさ、照山ひさ子

女流画家協会　事務所
代表　　中村 智恵美

〒210-0024
川崎市川崎区日進町 1-2-307
TEL&FAX：044-272-5200